

<p>エントリー名：宮城県小牛田農林高等学校 鈴木崇之</p>	
<p>活動名：校内外との協働で魅力ある学校へ 学科や地域の特色を活かしたカリマネの実践</p>	
<p>解決すべき課題：～本校の概要～令和 5 年度に創立 135 年を迎える伝統校で、全国的に見ても珍しい総合学科と専門学科（農業技術科）の併設が特色。しかしながら、以下の①～③が課題。 ①総合学科には科目選択の目安として四つの系列（人文社会、自然科学、情報ビジネス、健康福祉）が設定されている。教員の専門領域も多様だが、系列を越え協働性を発揮することが困難。 ②職員による学校評価において、職員間の連携を問う項目では否定的回答が例年 3 割以上。特に学科間でセクショナリズムに陥りがちで、二学科併設の特色を活かしきれていない。 ③昔から地域社会を担う人材を輩出してきたが、新型コロナウイルス流行以降は地域とのつながりが途絶えがちに。また個人的なつながりが多く、持続可能なシステムとは言い難い。令和 9 年には、美里町（本校所在地）内における高校は本校のみになる。地域と協働する重要性はますます高まり、活動の充実と体制整備が急務である。</p>	
<p>目標・方針：以下の①～③の協働で、上記「解決すべき課題」にアプローチする</p>	
<p>①総合学科内の各教科・各系列＋総合学科内の各教科・各系列 総合学科の教員の協働性を高め、専門領域の多様さを活かす</p>	<p>学校内外のリソースを結び付け、伝統と特色を活かした魅力ある学校に進化していく</p>
<p>②農業技術科＋総合学科 学科を横断した取り組みを実施する</p>	
<p>③地域＋学校 地域資源を発掘・整理・活用する</p>	
<p>活動内容：上記の「解決すべき課題」と「目標・方針」に対応する形で以下の内容を実施</p>	
<p>①—1 総合学科の全選択科目を SDGs との関連で整理した「SDGs 学びの」地図を作成 各教科・各系列を越え、総合学科に関わる全教員が協力し、SDGs との関連で学習内容を整理した一覧表を作成。SDGs を通して俯瞰的な視点から各教科・各系列間のつながりを捉え、各教科の授業や探究活動をデザインした。</p>	
<p>①—2 「総合的な探究の時間」の指導体制見直し～「ファシリテーター＋アドバイザー制」～ 探究活動で実際に授業をする教員を「ファシリテーター」、授業には入らず、生徒の探究テーマに応じて専門性を活かしたアドバイスを行う教員を「アドバイザー」と位置づけた。総合学科に関わる全教員が役割分担しながら探究活動の指導にあたる指導体制を構築した。</p>	
<p>②—1 草の根からはじまる学科横断型授業 いきなり学校全体で取り組みを行うのではなく、様々な教員のニーズを聞き取り、少しずつ学科横断型授業の実績を積み上げた。「学科横断は当然」という雰囲気徐々に醸成した。</p>	
<p>②—2 学校の PR を合言葉に！運営計画の目線合わせ 県内の総合学科は軒並み定員割れを起こしており、農業を専門に学ぶ高校生も減少傾向にある。危機意識を共有し、「学校の PR」を両学科の運営計画に位置づけ共に取り組んだ。</p>	
<p>②—3 学科横断探究交流会の実施 これまで探究活動で両学科が交流する場面は、年度末にその成果を発表するのみだった。年度途中の中間発表を学科を越えて行うことで、生徒にとっては他学科からの貴重なアドバイスを 得る機会に、教員にとっては指導ノウハウや外部連携先を共有する機会にした。</p>	
<p>③—1 生徒の社会貢献をしたい気持ちを尊重、ボランティアの推進からはじめる地域協働 生徒向けアンケートから社会貢献意識の高さが判明（「あなたは社会貢献をしたいと思いますか」→肯定的回答が 9 割以上）。具体的なボランティア活動を通じて地域協働を再スタート。</p>	
<p>③—2 地域を探究活動のカリキュラムに組み込む～「地域探究」始動～ 美里町を題材にした「地域探究」を新しく実施。さらに学校近辺に広がる世界農業遺産「大崎耕土」を活用した講演会などを実施。他の地域にはない、本校独自のカリキュラムを作成。</p>	

<p>取組の過程：全てのベースに「ビジョンの共有」と「働き方改革の視点」を</p>
<p>※ビジョンの共有→本校と実態が近く、先進的取組を行う島根県の二校（いずれも「地域との協働による高等学校魅力化推進事業」）へ視察を実施。総合学科、農業技術科、教務部の三つの立場の教員が参加し、報告会では目標・方針①～③を提言。全校でビジョンを共有。</p>
<p>※「働き方改革の視点」→「今あるものを活かす」「教員の必要感と手ごたえを大切にする」「ICT 等を活用し現実的な負担軽減を図る」ことで、新しい取組に伴う疲弊感を回避。</p>
<p>①—1 企業の経営方針や入試問題でも取り入れられ始めた SDGs。学校現場でも必要感が増大（本校教員向けアンケート「SDGs に関心がありますか？」→「非常に関心がある・まあまあ関心がある」の合計が 8 割以上）したことを背景に「SDGs 学びの地図」の作成開始。作成はシラバス検討のタイミングとあわせ、業務の効率化を図った。さらにペーパーワークに陥ることを避けるため、探究活動のテーマ設定の教材として活用したり、生徒の反応を教員へフィードバックしたりすることで、手ごたえを感じられるようにした。総合学科に関わる教員が一致団結し、SDGs という俯瞰的な視点を持ち、情報交換をしながら指導にあたるようにした。</p>
<p>①—2 探究活動において外部との連携は不可欠だが、連携先の選定や交渉など指導する教員の負担感は大きい。複数の教員が専門性を活かして指導にあたることでこれを容易とし、探究活動を活発化。アドバイザーの指導は iPad と学習アプリ（ロイロノート）を最大限活用し、業務の効率化を図りつつ、教員の ICT の研修も兼ねながら進めた。役割分担と教員の必要感が高い ICT の研修を取り入れることで、探究活動をきっかけに総合学科内の教員の協働性が向上。</p>
<p>②—1 様々な教員のニーズを井戸端会議のように聞き取り、ボトムアップから取り組みをスタート。その上で学科横断の授業を単発で終わらせず、他の活動につなげたり、内外へ情報発信をしたりすることで、少しずつ学科の垣根を払っていった。例）農業技術科で育てた野菜を総合学科のフードデザインの授業で調理し、レシピにまとめる→農業技術科の販売会で野菜をレシピ付きで販売したり、学校のお便りやホームページで取り上げたりした。</p>
<p>②—2 学科を越えて話し合いを重ね、リアルタイムで情報発信する「ブログ」をホームページに創設したり、各学科のお便りを一括して近隣中学校へ配付したり、足並みを揃えて効果的な PR を実施。さらに地域のイベントに共同参加し、PR 活動を通して学校の一体感を醸成した。</p>
<p>②—3 両学科の指導ノウハウを共有し、プレゼンテーションの様式をそろえて中間発表会を実施。普段見落としがちな他学科の指導内容に触れ、改めて二学科併設という本校の強みを認識する機会に。さらに発表会を通して、外部の連携先を共有し活動の幅を広げるなど、具体的な成果にもつなげた。探究活動を通して学校を活性化させていこうという共通認識が成立した。</p>
<p>③—1 学校評議員などこれまでのつながりを活かして活動を計画。（株）ファーストリテイリングの「届けよう、服のチカラプロジェクト」を通して公共施設との関わりを構築するなど、新規開拓も並行して実施。新聞や町の広報で取組を地域に周知し、さらに活動の輪を広げた。生徒にはキャリアパスポートを用いて活動を振り返らせ、自ら進んで活動するよう促した。</p>
<p>③—2 令和 3 年度より美里町では地域おこし協力隊が活動している。地域探究の導入で協力隊の講演を実施し、生徒が地域に関心をもつきっかけとした。さらに世界農業遺産「大崎耕土」の講演会や見学を実施。振り返りをポスターにまとめ、全国農泊ネットワーク宮城大崎大会で展示するなど、地域資源を掘り起こしながら行政などとも連携を広げ、地域との協働を強化。</p>
<p>活動の成果：○生徒が多様な視点を獲得→各方面の協働を意識した教育活動を展開することで、多角的な指導が可能に。様々なコンクールに多数入賞（河北新報第 28 回新聞記事コンクール「学校賞」、2022 年度「届けよう、服のチカラ」アワード優秀賞）するなどの成果が生まれた。○取組のシステム化→各方面との協働により学校の魅力向上を目指す新委員会（学校魅力向上委員会）が発足。単発的・属人的な活動ではなく、継続的・組織的な取り組みへと進化。○内外の様々な組織や人と協働することに対して、教員がポジティブに捉えるようになった。さらに新たな領域での協働へつながった→地域と部活動の協働（例：吹奏楽部による町内福祉施設へのコンサート）、県内の他校の総合学科との協働（オンラインの相互発表会）など、多数の波及効果あり。</p>